

平成28年度 佐賀市立嘉瀬小学校 学校評価結果

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
ふるさと嘉瀬を愛する青藍の子の育成	① 確かな学力を身につけさせる。 ② 豊かな人間性を育む。 ③ 主体的に活動しやりぬく力を育む。

達成度 A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価								学校関係者評価委員会から	
① 確かな学力を身につけさせる。								学校関係者評価委員の 評価(A~D で記入)	意見や提言など
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者 評価委員の 評価(A~D で記入)	意見や提言など
教育活動	●学力の向上	基礎学力の向上を図ることができたか。	・児童アンケートにおいて、「授業の内容がわかる」の評価を90%以上にする。 ・保護者による評価において、「学校は学力の向上に取り組んでいる」の評価を90%以上にする。 ・家庭学習習慣を定着させ、課題提出率を100%にする。	・算数における児童の実態に応じたTT、少人数指導、個別指導などを計画的に実施する。 ・学び合いを取り入れた学習過程を実践する。 ・行事など関連させ活動を実施したり、伝え合う活動を行ったりして言語活動の充実を図る。 ・「家庭学習のすすめ」を作成し、家庭と連携した学習習慣の定着を図る。 ・「がんばろう週間」等の取組を充実させ、児童の課題提出については級外と連携を取り組織的に行う。	A	・算数科の研究において「授業の流れづくり」等の授業改善を行い学力向上に成果があった。 ・児童アンケートにおいて92%の児童が、「授業の内容が、よ分かる・分かる」と答えている。 ・保護者アンケートにおいて95%の保護者が、「学校は、学力向上に、よく取り組んでいる・だいたい取り組んでいる」と答えている。 ・児童の課題の提出について級外との連携を図り組織的に行った。	・家庭と連携し「家庭学習の手引き」をより活用していく方法を検討していく。	A	
教育活動	○読書習慣の定着	子どもたちに望ましい読書習慣が形成できたか。	・80%以上の児童が、100冊または8000ページ読破の認定証をもらう。	・お勤めの本紹介、必読図書選定で読書を楽しむ環境を作り、100冊読んだ児童や8000ページ読破した児童には認定証を授与する。 ・「家読」デーを毎月実施し、家庭での親子読書を推進する。 ・朝の貸し出し時間を設けて読書意欲を喚起する。	B	・100冊認定または8000ページ読破することができた児童は50%満たず目標に届いていない。 ・お勤めの本の紹介や、朝の貸し出し時間を設けて読書意欲を喚起し望ましい読書習慣の形成を進めたが、意欲的に読書に取り組んだと答えた児童が80%に満たない。	・読書集の活用も含め、さらに読書の大切さを話し、望ましい読書習慣の形成を進めていく。 ・司書との連携を図り、次年度も朝の時間に学年ごとの貸し出し時間を設ける。	B	読書習慣は高学年は行事が多く時間を取るのが難しいのではないと思う。認定冊数や読破ページの数値をもう少し下げてほしいと思う。自宅でTVを見る時間をもう少し読書にあてられたいと思う。
学校運営	○教職員の資質向上と組織の活性化	授業力向上の研修の充実を図ることができたか。 三部体制が確立でき教育活動が組織的に展開できたか。	・担任等全員が研究授業を実施する。 ・グループ研等でお互いの授業力を高める。 ・センター講座や他校の授業研究会等に積極的に参加する。(一人一回以上) ・教師の同僚性の構築をめざし、教職員の自己評価の満足度を高める。	・校内研究の計画にそって「伝え合う活動」を取り入れた研究授業を全員がおこなう。 ・部長会を定期的に関し、取り組みの共有化と共通理解を図るとともに、各部は部長を中心に取り組み部内専決をめざす。 ・二人二役や部内での活動を通してミドルリーダーの育成に努める。	A	・算数科の研究を軸に指導案の検討、模擬授業、授業研究会を通して授業力が向上した。 ・部長会で取組の見直しと共有化が図れ、育成部を中心に計画をしっかりと立て、全職員の共通実践ができた。 ・学力向上のための研修や特別支援教育に係る研修など、充実した職員研修ができ、教師力を高めることができた。	・今年度の校内研究の成果を継続しつつ、さらに同僚性を高めていく。 ・講師を招聘しての研修会を行う。	A	
教育活動	●教育の質の向上にむけたICT活用教育の推進	教職員のICT活用教育のスキルアップが図れたか、また、ICTの活用による授業を始めとした効果的な教育活動が行えたか。	・週2回以上は電子黒板を活用する。 ・ICT支援員等を活用してICT活用力の向上を図る。 ・児童アンケートにおいて90%以上の児童がICT活用学習に満足する。	・教育情報化推進リーダーを中心に電子黒板の使い方の研修をおこなって全職員がいつでも使えるようにする。 ・ICT活用授業の相互参観を行う。 ・ICT支援員の勤務日にミニ研修を行う。	A	・電子黒板はどの学級でもほぼ毎日活用した。ICT支援員も連携をとって、教科のみならず全ての教育活動に効果的に活用した。特に校内研究の算数科において活用は効果的であった。 ・ICT支援員から授業や文書作成等で役立つノウハウを教えることができた。	・ICT活用教育の研修を深め、電子黒板の効果的な活用方法、ノートパソコン等の具体的な使用方法等を学んでいく。	A	・ICT活用による授業では子どもたちの興味津々な姿や実際に積極的に活用して発表する姿を見て先生方の努力の成果を有難く感じた。 ・もう少し電子黒板を効果的に使用していくといつかかもしれない。(特定教科だけではなく)子どもの方が詳しくはありますが、互いに学び合うことでみんなで高め合っていく。
② 豊かな人間性を育む。								学校関係者評価委員会から	意見や提言など
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者 評価委員の 評価(A~D で記入)	意見や提言など
教育活動	●心の教育	思いやりの気持ちを持って生活できているか。 子どもたちは元気な気持ちのよいあいさつができたか。	・保護者による評価において、「命を大切に、思いやりのある豊かな心の教育に取り組んでいる」の評価を90%以上にする。 ・フリー参観デーのアンケートにおいて、「子どもたちのあいさつの様子が良い」の評価を90%以上にする。	・豊かな心育成部を中心に毎月人権教室を行い児童の人権意識を高める。 ・「心のアンケート」を通し、自分や友だちのよさを認める活動を行う。 ・フリー参観デーに「ふれあい道徳」を設定し、日頃の取り組みを保護者や地域に公開する。 ・あいさつ強化月間を設定し、学級ごとに目標を決めて取り組む。「あいさつ」合い言葉や「かっこいい言葉」を定着させる。 ・全校で学級目標発表会を行い、集団への所属意識の高揚を図る。	A	・11月には、パラリンピックメダリストの柳川春日さんによる人権講演を行った。子どもたちは「目も見えなくても夢は見ると強く生きていく柳川さんの姿に打たれた。 ・保護者アンケートにおいて97%の保護者が「学校は、豊かな心を育てる教育の取組を評価している」。 ・10月には「ホスピスの会」の方を講師に迎えての命の授業を全学年で行い、好評であった。 ・児童会や縦割り班が交代であいさつ運動に取り組んでいる。全国の学校の中から「あいさつ運動大賞」をいただいた。 ・フリー参観デー保護者アンケートにおいては87%の保護者が「家庭や地域であいさつをよくしている」と答えている。	・次年度も毎月の人権教室を充実させるとともに命の大切さについて考える講演会等の開催を検討していく。また、豊かな心を育てるために本物に触れる機会を設ける。	A	・子どもたちは地域の行事に参加することで豊かな心を教育を受けることができ、協力することや助け合うことの大切さを体験して学びやうたがった。また、豊かな心を育てるために本物に触れる機会を設ける。 ・学校が全然楽しくない、学習も全然楽しくない、あいさつや早ね、早起きができないと答えている児童が同じ子どもであれば早く解決してあげたい。全体評価は高い評価になっているので、とてもよい学習環境の中で楽しい毎日を送っている子どもが多いと思う。さらに増え続け100%に近づいていくことができる学校だと思ふ。
教育活動	●いじめ問題への対応	いじめの早期発見、早期対応ができたか。	・児童アンケートにおいて「友だちとよくできた」の評価を90%以上にする。	・毎月1日にいじめアンケートを実施し、児童の状況把握に努め、いじめの早期発見、早期対応に努める。	A	・2回のアンケートではいじめと認知した事案は3件発生したがすぐに対応できた。 ・児童アンケートにおいて94%の児童が「友だちをいじめたり、差別したりしない、仲良くすることが、よくできた」と答えている。昨年よりも「いじめ追放」の意識は強くなっている。	・次年度も毎月1日にいじめアンケートを実施し、いじめの早期発見に努めるとともに、不安を持つ児童に対しては担任以外も話しを聞くなどして個別対応と組織的対応を充実させていく。	A	いじめ問題にはよく取り組んでもらっていると思う。やはり早期発見が大切だ。 ・アンケートについては何が本当で何が大事かを見極めることが重要である。
教育活動	○地域とともに発展する学校	地域連携を柱とした教育活動の実現と広報ができたか。 子どもたちはふるさとを誇りに思うことができたか。	・保護者による評価において、「地域連携教育に取り組んでいる」の評価を90%以上にする。 ・児童アンケートにおいて「地域の愛着の項目の評価を高める」。	・生活科、総合的な学習および教科等の授業へゲストティーチャーを活用したり、地域人材を活用したりする。 ・新聞等への記事の投げ込み、学校だより、学年・学級便り、ホームページ等を活用し活動の様子を保護者や地域に発信する。 ・地域行事への積極的な参加を呼びかけたり、行事への児童の参画を促したりする。	A	・学校行事と地域行事の連携、学習活動への地域・保護者の方々の協力・支援などがあり、教育活動がスムーズに実施できた。 ・保護者アンケートにおいても「地域と共に発展する学校づくりにめざす学校運営に、よく取り組んでいる・だいたい取り組んでいる」に100%の評価をいただいた。 ・児童の意識調査で「みんなで協力して何かをやり遂げられたことがありますか」という問いに「はい」と答えた児童が100%であった。 ・児童の活動の様子の発信は学校便り、学級便り、HPで随時行った。	・児童数が少ない学年もあるので、地域と連携した活動の実施方法を見直しながら実施していく。	A	・スズメソラン時の授業支援の回数が今年度は少なかった気がする。もっと活用してほしい。
③ 主体的に活動しやりぬく力を育む。								学校関係者評価委員会から	意見や提言など
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者 評価委員の 評価(A~D で記入)	意見や提言など
教育活動	○ふるさと学習の充実	子どもたちに主体性や地域への愛着を育てることができたか。	・80%以上の児童が、地域との連携行事や体験学習への満足感をもつ。	・地域学習教材の教材化と地域人材の活用を意欲的に取り組む。 ・地域と連携した行事における児童の参画を促し、結果のアンケートをとる。	A	・学校行事と地域行事の連携をはじめ、学校・保護者・地域が密接に連携することができた。 ・各学年、地域人材を活用できた。 ・行事や体験学習後の児童の感想は「たいへん楽しい、満足している」が多い。	・具体的なアンケートの実施をする。 ・地域人材とカリキュラムの構造化。	A	・ふるさとを大事に大切にすることが当たり前になっていることは素晴らしいことと思う。
教育活動	●健康・体力づくり	子どもたちに望ましい生活習慣が形成できたか。	・毎月1日のノーテレビノーゲームデーの実施率を90%以上にする。	・ノーテレビノーゲームデーを毎月実施し、基本的な生活習慣の定着を図る。実施の際には実態調査等を行って昨年以上に充実させる。 ・保健委員会による健康・体力づくりに向けた活動を行う。	A	・家庭と連携して取り組むことができた。 ・87%の児童が毎月1日のノーテレビノーゲームデーを実施することができた。 ・健康タイムや健康エスタの活動が積極的に進められ、生活習慣の意識の高揚ができた。	・家庭の協力が難しい児童への支援の工夫が必要である。	A	・ノーテレビノーゲームの取り組みはとてもいいと思う。子どもも頑張ろうとしている。これからは続けてほしい。
教育活動	○幼保小中連携教育の充実	計画的な交流が実施でき、児童の主体性を育むことができたか。	・アンケートで80%以上の児童が、幼保小中の連携活動や教育活動への満足感をもつ。	・年間を通して計画的な幼保との交流を実施する。 ・出番・役割・承認の場を与える。	A	・幼保小の子どもたちの交流活動が充実していた。また職員間協議会や夏季休業中の研修を含め交流が多く充実していた。 ・80%以上の児童は交流活動に満足している。 ・年間3回の幼保小交流会をしているので、ペア同士の親密な交流ができていく。	・幼保小連携では対応する職員に対し子どもの数が多いので効果的な交流活動を考える必要がある。	A	・今は幼保の子たちが小学校に慣れるだけの取り組みだが幼保小で学習のつながりを意識してもいいのではないかと。
本年度の重点目標に含まれない共通評価項目								学校関係者評価委員会から	意見や提言など
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策	学校関係者 評価委員の 評価(A~D で記入)	意見や提言など
特定課題	○小学校低学年の学習環境の改善充実	生活習慣・学習習慣の定着を図ることができたか。	・毎日朝食を取る、明るい返事ができる、正しい姿勢で学習できる、宿題を毎日提出する等の目標達成率を90%以上にする。	・「わくわく」を活用し、具体的な目標を設定し、生活習慣・学習習慣について指導する。 ・家庭教育のあり方や望ましい生活習慣の啓発を行う。(講演会、土曜授業の活用、親子ふれあい活動等)	A	・設定した目標すべてにおいて「達成」「おおむね達成」することができた。学級便り等での保護者への啓発、宿題や道具の準備の保護者チェックが効果的であった。 ・講演会や親子ふれあい活動を通して家庭教育のあり方が浸透した。 ・養護教諭や学校栄養職員と協力し、体と心の成長や食育の授業を行ったり、望ましい生活習慣について学んだ。	・家庭教育のあり方や望ましい生活習慣の形成についての講演会を計画したり、保護者に呼びかける機会を増やしたりして啓発に努めていく。(講演会、土曜授業の活用、親子ふれあい活動等)	A	・家庭教育のあり方についての講演会をふやしたり、親子ふれあい活動をとり入れることが大切だと思ふ。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

学校教育目標の実現に向けた取組を全職員で共通実践してきた結果、保護者アンケートにおいては、学校の取り組みに対し、ほとんどの項目で95%以上の保護者が「よく取り組んでいる」「だいたい取り組んでいる」と答え、保護者の満足度は高いという結果が出ている。また家庭での取り組みにおいても、子どもへよく働きかけているという結果が出ている。これは、学校の取組が保護者の理解を得て、保護者への啓発につながっていると考えられる。これらのことから、本校の学校教育目標に迫ることができたと考える。また、校内研修を算数科を中心に据え、全職員が模擬授業や授業研究会を行い、切磋琢磨しながら教師力を高めることができた。次年度は、今年度確立した学びのスタイルを継続実践し、授業力向上を図りつつ、地域と連携した教育活動を基盤に据えながら、新たな課題にむけてよりいっそうチーム力を高めていく。また、「いじめ問題への対応」「読書習慣の定着」「ICT活用教育」、及び「学力の向上」については、改善を加えながら取り組みを継続していく。

●は共通評価項目、○は独自評価項目